

海外だより

## ベルリーナー・アイゼン

影 近 博\*

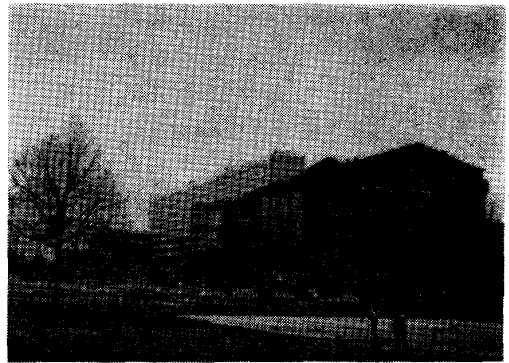
飛行機から見下ろすベルリンの夜景には何とも形容しにくい不気味さがある。青白く浮き出た国境線、水銀灯の帯に区切られた、街灯賑やかな西と暗闇の東。陸の孤島西ベルリンの現状を実感させる光景である。私は1983年8月までの2年間その西ベルリンで留学生活を送った。

留学先はベルリン工科大学第17学科 (Werkstoffwissenschaften) の金属研究所 (Institut für Metallurgie) である。正教授であり当研究所の Direktor でもある Prof. Kammel の下で合金めつきの研究に加わった。ベルリン工科大学は第二次大戦後設立されたものであるが、その前身は1810年創立のベルリン大学である。Institut für Metallurgie の歴史はさらに古く1770年の王立 Bergakademie 創立に遡る。研究の自由と独立の理念に基づいて多くの革新的な業績を生み出してきた Institut とそれをとり巻く大学の歴史は、戦争によつて外見上は壊されたものの、今もドイツ人研究者の自負心の中に生きている。

私は、留学初期の頃ドイツ的な歴史の重みに息苦しかつた。石造りの建物から受ける冷たさと圧迫感がドイツの排他性に重複してみえた。しかし、今ではそれがほんの一面でしかないと考えている。歴史への誇りと信頼は、泰然として時に頑固なドイツ人の生活観を裏打ちしているものに違いない。一方向に向かつてまっしぐらに進んできた日本と画然と異なる何かがある——これが2年間の体験から得た私の印象のすべてである。

その印象を最も強くしたのは、Berlin Museum で“Berliner Eisen”を見た時であつた。

“Berliner Eisen”とは18世紀後半にドイツで花咲いたわずか70年の短命な鉄の文化である。1790年代、産業革命がプロイセン王国 (今の北ドイツ・ポーランド地方) に浸透してくるにつれ各地に王立の精錬所が興った。その後、兵器を中心とした需要の増大と国の振興政策によつて精錬・鑄造技術はめざましく進歩した。1813年対仏ドイツ解放戦争の勃発を契機に、時のプロイセン王女マリアヌは王室に女性同盟を結成し、金製の食器や装飾品を廃する儉約奨励をはじめてから“Berliner Eisen”は金 (Gold) の代替品としての道を歩み出すこ



ベルリン工科大のキャンパス

とになつた。“Gold gab ich für Eisen” 金 (Gold) でもつて鉄 (Eisen) を買わしめるこのキャンペーンの狙いは、プロイセン王国の富国強兵策を資金面で支援することにあつたのだが、結果としてその後、鉄の芸術品を数多く生み出しドイツ独特の文化に高めることになつた。精緻な加工を施した耳飾りから芸術性の高い彫刻による水瓶、モニュメントの類まで今も黒い光沢を保っており、これが鉄かと思わせる素晴らしさである。1820年代の全盛期には上流婦人の装身具はすべて“Berliner Eisen”であつたと記録されている。しかしながら1838年にはほとんどの精錬・鑄造工場が閉鎖の危機に直面した。それはなぜか——一つには需要家 (婦人方) が黒く重々しい鉄の“外観”に飽きたこと、もう一つには王室まるかかえの職人達の金にいとめをつけない“技術開発”が重荷になつてきたことにある。鉄の高級化が採算性を無視したために挫折した好例であろう。その後1850年代に王室の援助で再び息を吹き返したが、手間のかかる“Berliner Eisen”はコストアップと需要低迷におされて、ついに1874年最後の鑄造所が閉鎖されその歴史の幕を閉じた。わずか70年余り、金 (Gold) と競つた鉄 (Eisen) は遂に金 (Gold) にはなり得なかつた訳である。

今日の高炉に始まるマスプロされた鉄しか知らない私達に対して、鉄に求められる真の技術とは何かを示唆しているようでたいへん興味深いものであつた。

ドイツは東西に2分され、西ベルリンはコンクリート壁に包囲されている。しかし内も外も、東も西もドイツ人が住んでいる状況は昔から変わつてはいない。過去にも何度か社会体制が変化してきている。その大きな歴史の流れの中でほんの一時こうして西ベルリンが孤立しているのだとドイツ人は言う。金銀に飾られた欧州の宮廷文化の中にありながら、荘重で輝きのない鉄文化を創り出したドイツと、それを変わらず保存し振り返るドイツ人気質。すべてに通じるものがあるように思える。

\* 日本鋼管(株)技術研究所